

防衛大学校本科第2期学生及び理工学研究科第1期学生  
入校式における学校長式辞（昭和49年4月5日）

本日、防衛大学校本科第2期、研究科第1期学生の入校式を挙げるに当りまして、木野防衛政務次官<sup>注(1)</sup>、中村統合幕僚会議議長<sup>注(2)</sup>、松林防衛医科大学校長<sup>注(3)</sup>、三好陸上幕僚副長<sup>注(4)</sup>、須藤海上幕僚副長<sup>注(5)</sup>、鈴木航空幕僚副長<sup>注(6)</sup>をはじめ、地元横須賀市からは、能勢市議会議長<sup>注(7)</sup>、市長<sup>注(8)</sup>代理堀内助役並びに小佐野商工会議所会頭<sup>注(9)</sup>等多数の来賓並びに父兄各位の御臨席を得ましたことは、防衛大学校にとって非常な光栄と存じます。ここに職員並びに学生一同に代り心から御礼申し上げる次第であります。

理工学研究科に入校された諸君は、すでに自衛隊員としての経験を積んでおられ、今回特に選ばれて、高度の科学技術の研究に当ることになりました。一国の防衛力が科学の進歩と技術の開発とにどれほど左右されるかは、世界の歴史が明示しています。陸・海・空各自衛隊の装備を近代化する上で、諸君の創造的な頭脳に対する期待は絶大であります。研究科における諸君の精進を期待します。

本科に入校された諸君については、諸君がわが防衛大学校への進学を決断されたことに対し、心から敬意を表しますと同時に、全校の教職員並びに学生一同とともに、諸君を日本国防衛の同志として双手を挙げて歓迎する次第であります。



第3代学校長 猪木 正道

---

注(1) 木野晴夫

注(2) 中村龍平（陸）

注(3) 松林久吉

注(4) 三好秀男

注(5) 須藤吉樹

注(6) 鈴木瞭五郎

注(7) 能勢省吾

注(8) 横山和夫

注(9) 小佐野皆吉

わが防衛大学校の教育目的は、防衛庁設置法第33条に明示されていますとおり、「幹部自衛官となるべき者を教育訓練する」ことであります。この目的を達するため、防衛大学校規則第5条は、「特に広い視野を開き、科学的な思考力を養い、豊かな人間性を培う」の三点を強調した上で、五つの方針を明らかにしています。

その第一点は、教育訓練、規律ある団体生活及び学生の自発的に行う各般の活動を通じ、国家及び社会の一員としてはもとより、幹部自衛官としてその職責を尽しうる性格を育成することです。

第二点は、教育課程において、大学設置基準に準拠して、一般教育、理工学または人文・社会科学及び防衛学に関する学理及びその応用を授け、幹部自衛官として必要な基礎となる学力及び技能を育成することです。

第三点は、訓練課程において自衛隊が必要とする基礎的な訓練を行うことです。

第四点は、学生全員が参加する体育活動及び各種の運動競技を奨励し、強健な体力と旺盛な気力を育成することです。

第五点は、あらゆる機会において、陸・海・空各自衛隊の幹部自衛官となるべき者の間に、理解協力の気風を育成することです。

これら五点は、いずれも歴史の教訓から深く学んで、数十年の先まで見通した諸先輩の立派な見識を物語っています。ドイツ連邦共和国が陸・海・空の士官学校を廃止して、昨年10月から連邦軍大学を創立したことも、防衛大学校の教育方針の正しさを傍証するものといわなければなりません。

防衛大学校に入校された諸君は、本校の教育目的及び教育方針を正しく理解して、教室、実験室、図書館に、屋外の競技場並びに訓練場に、青春の最も貴重な4年間を悔いなく過していただきたいのであります。

防衛大学校本科の専攻は、従来、電気工学、機械工学、土木工学、応用化学、応用物理学及び航空工学の理工学分野に限られていましたが、本年から新たに国際関係論及び管理学の2専攻が設けられることになり、第22期入校生諸君の一部は、将来、人文・社会科学を専攻するはずであります。人文・社会科学と理工学との関係は、車の両輪に似ており、一方が他方を排するような性質のものではありません。国際関係論と管理学との2専攻が新設されたことは、科学的な思考力を養うという本校教育の根本方針を更に徹底した結果といえましょう。

最後に私は、空想的平和主義の害毒について一言述べたいと思います。国家の平和と安全が、国際社会を構成する主権独立国家の自衛力に負っていることを直視せず、非武装中立という空想の世界に逃避しようとするのは、自分の国に対してのみならず、全人類に対する責任を放棄したきわめて危険な思想であります。人間の心の中に獣性と魔性とが宿っている限り、恒久平和の理想は遺憾ながら実現の可能性を欠いています。“反戦”、“平和”を声高く叫ぶ者の中に、残酷かつ好戦的な者が少なくないことから見ても、

空想的平和主義の害毒は明らかであります。

日本国が、国際社会の一員として尊敬されるためには、精強な自衛力は不可欠の前提条件といわなければなりません。

本科並びに研究科の新入生諸君が、このような認識と使命感とを堅持して学業に精励されることを期待して、私の式辞を終わります。